

『教育技術』一九五八年四月号（教育技術連盟編／小学館）

たしかな学校はここに生まれる

—教育観の不毛を開拓する道—

矢口 新

—

たしかな学校という題を与えられた。わかったようなわからないような題であるが、なんとなく気持だけはわかるような気がする。最近学校がおかれている社会環境を考えてみると何か教師たちは振り廻されているのではないかという気がするのではないだろうか。風にゆらぐ葦という言葉があるが、その如くに教育がゆらいでいる。昨日まではこうかと思ひこんでいたものが、今日はすっかりくつがえるという、少し大げさかも知れないが、何かたよりない。これこそ本当の道だ、一生をかけてやるべき道だと思ひこむものがないという気がする。しかしそういう理想をわれわれは欲している、求めている。そういうものをどこに、また何に求めたらよいのか。こんな気持がたしかな学校ということをもう一度考えてみたいという気持になったのではないか。

戦前の教育はよかったという人がいる。根本方針が一定しており、教師のよるべきものが与えられて、確信をもって教育が出来たというのである。成程戦後は、それにくらべると、確かにかわったようである。戦後言われたことに、カリキュラムは教師のつくるものという言葉があった。必ずしも一般にこの言葉が正しく消化されてはいなかつ

たけれども、教師の真実の働きが強調され、責任が課せられたことは事実である。これはある意味で、よるべきものが失われた感を一般の教師に与えたようである。自らの責任をもって立つものは、それだけ苦勞も必要である。戦前はよかったというのは、そういう意味では、怠惰な人間のよさであったのではないか、自ら考え、責任をもつことを忘れた教育を戦前はしておったのではないか。国家からきめられたことをやっておれば教育になると考えていたが、そこに教育があるという考え方が既におかしいのである。教育とはそんな所にあるのではない。それがわからない人が戦前はよかったなどというのである。

地域社会の実態を考慮して教育すべしということが言われた。これも単なる言葉として理解された傾向はあるけれども、その真実は教育というものの真のあり方についている。生活の中から必然的に教育が生れるので教育はそういう生きたものである。それを忘れて、国定教科書による、固定概念のみの空虚な教育を批判するのがこの言葉であった。空虚な形式的教育に安住していた教師にとっては、真実の営みをするのは、決して容易なことではなかった。だから戦前はよかったと感ずるのは、当然の人情であったかも知れない。

しかしこういう道を通じて、教師は、自らの目で見、心で感じ、考えたことを、つまり生きた人間的教育に心をむけるようになった。それは馴れないことから来る一種の苦勞も伴ったけれども、自立的な人間の喜びも持ち得るようになったというべきであろう。

教員自身が教員組合を結成して、その意見を表明することが出来るようになったことも大きな変化である。場合によっては、政府の方針に対して反対することもあるのである。現在の組合は、必ずしも教員すべての意見、或は個々の学校の意見を代表しているとは言いがたい。しかしそれは現在の教員が奇妙な日和見主義にあるからであって、教

師が決意をすれば、全員の意見をまとめて堂々と意見を発表することが出来るようになった。これは戦前とは全く異なったことである。

教師は、戦前より自由になり自主的になっていく。少くともその可能性は増大している。しかし一方教師は、さまざまな人々の意見と主張を聞いて教育活動を行わねばならなくなった。地域々々に教育委員会が出来た。一時は選挙によって委員が選出されたが、これは、民衆の良識を教育に反映させるという考え方である。現在は選挙でなくして任命になっている。任命となるについては政治的な微妙な問題もあった。選挙の時代には、教員組合の圧力によって、教員の古手ばかりが教育委員に選ばれたということもあって、必ずしも民衆の良識が代表されたとは言えない。といって任命制になって、また別な考え方で教育委員が選ばれて、そこにもまた必ずしも良識が代表されない場合もある。教師たちが、そういう人々との関係で苦勞をしなくてはならぬことも多いのである。

教師の苦勞は、そういうことばかりでない。P・T・Aという学校を中心とした団体が出来、両親と教師が協力して子供の教育を考えるという体制になって、教師の接触範囲は広がった。さまざまな意見にふれて、その間に正しいものをつくりあげる努力を必要とするようになった。B・T・Aなどといわれて、必ずしも学校教育にプラスする所ばかりではないこともあって、その応接に疲れ果てることもあった。たしかに戦後の教育は容易でなくなった。教師は安穩としているわけに行かなくなった。

このように見ると、戦前の教育がよかったかどうかは別として、戦後の教師の苦勞はたしかに倍加しているといえよう。しかしこの苦勞は、光榮ある苦勞ではないか。自らの頭で考え、自らの心で物事を処理する者の苦勞ではないだろうか。言いかえれば、自主と責任を与え

られたがための、当然受くべき苦難ではないだろうか。

教師は、教育のプロフェッショナルであって、さまざまな人々の意見を聞きそれを位置づけ、正しい実践にまとめる責任をもっている。教育委員にしても、両親にしても、政治家にしても皆素人である。それらの素人の意見が教育の実践においてどう生きるかは、教師の位置づけ方によるのである。教師がそれらの意見を正しく位置づけるのは苦勞であるが、それは専門家としての権威と責任において当然なされねばならないことなのである。

二

日本の学校教育は、日本人の教育観を背景として行われていることは言うまでもない。所で日本人の学校に対する考え方や期待は決してそれほど合理的でもなければ、科学的でもない。また社会における教育の機能を正しく理解しているとも言えない。そこで専門家たる教師の苦勞もまたひとしおだということが出来よう。

私は最近、イギリスの雑誌で行った誌上シンポジウムに参加する機会を与えられたが、その際に、イギリスの教育社会学者マッジという人が行った提案の論文について特に興味を感じたことがある。それは論文の主題に入るための序論の部分であったが、イギリスの教育観を書いた部分である。そこには大略次のようなことが書かれてあった。

イギリスの教育は、十九世紀において飛躍的な発展をして、現在では、産業と教育とが相ならんでイギリスの社会の二大関心事となっているといつてよい。そうして、イギリスの社会を進展させるためには、教育を充実することが特に必要だという見解は一般に行き亘っている。所で、イギリスの教育を如何に発展せしめるかについては、イギリスには、現在四つの観点がある。

その一は、階級的な観点である。この観点としては、二つの立場がある。一つは、労働階級という立場に立って教育を考える立場であり、もう一つは、都市の中産階級の立場からの考え方である。前者は労働階級への教育の開放という立場で教育についてのさまざまな見解を表明し、後者は、より広い立場で、あらゆる階層のすぐれた人々の教育という立場から教育問題を考える。両者は多少相異があるが、共に階級的なものを基盤にして考える立場においてまた共通である。

その二は、ファミリーの立場からの考え方である。いわば個人的な家庭的な観点である。労働階級に属する人も、中産階級に属する人も、いずれも一たび家庭に入れば、家庭人として、子供がより高い教育を受け、それによってより高い社会的地位をうける基礎をつくることを考えている。こういう意見は従来科学的に把握出来なかつたが、最近の社会学的研究いわば個人的、私的の発達により、そういう立場の考え方が次第にはつきりと把えられるようになった。この立場からの考え方は今後ますます生かして行くべく考えるべきであろう。

その三は、インテレクチュアリズムの考え方である。インテレクチュアルというのは、学問的に深く突込んでいくということであるが、そういう点からいえば、この立場は学問的立場といつてもよいかも知れない。ちなみにインテリジェンスというのは物わかりがよいという意味で、インテレクチュアルとはちがう。日本のインテリというのは、物わかりがよいということらしい。この辺の言葉の使い方は、なかなか微妙である。イギリスのインテリゲンチヤは、インテレクチュアルの方であつて、日本のと大分使い方がちがう。

その四は、伝統主義と革新主義の立場である。イギリスの教育者は伝統を守ることにおいては人一倍強い執着をもっている。昔からの教育をどこまでも守ろうとする。しかし一方超音速飛行機や原子力の問

題についても、たえず、最先端に立って行かねばならぬという意欲も持っている。この二つの欲求を如何に調和させるかということが、また大きな問題である。

以上のようなことが書かれてあつたが、これを日本にあてはめて考えてみるとどうであろうか。日本には残念ながら、このような教育観というか、教育目的観というか、そういうものが分化し、発達していかないのである。労働階級や中産階級が、その立場で教育の主張をしたり、インテリゲンチヤが教育を考えたりしないのである。日本では、はじめつからあるのは、ファミリー中心の教育観で、それ以外にはない。しかもその教育観は、ただ学校を卒業することだけが問題であつて、教育的考え方というものでない。そうして更に、国家が教育を運営することになつてはいるが、その国家の方策の基盤にあるものは、結局は両親の希望を満足させるという考え方で、やはりファミリー的観点である。

この日本の教育観の原始的性格の中で、学校は教育を行っているのである。そのことこそ、本質的に教師が苦勞しなければならぬことである。つまり、学校の教師は、日本人の素人の極めて原始的な教育観を位置づけ、処理して行かなくてはならぬ。そうして実践によつて、日本人の教育観をもつと合理的に、高度に、分化させなくてはならぬ。そうでなければ、真の教育を樹立することは出来ないであろう。

三

近代的な民主主義的な社会では、教育についてのさまざまな考え方があつたのが当然である。それを如何に調和させ、統一するか、そこに教師のまた学校の専門的立場がある。それが教育というものの中立的立場なのである。教育自体の立場なのである。

しかしこの教育自体の立場が、社会に厳然として位置を占めるには、社会全般の教育観も、今の日本の如き原始的な教育観ではためなのである。学校を卒業させればよいというただそれだけの教育観であり、教育内容や方法についての基本的な理解がないという状態では、教育自体の立場を尊重するという態度は生れ得ないのである。イギリスの如き、立場の分化があり、さまざまの教育観があることが、かえって教育者自体の自主的立場を尊重する態度をつくっているのである。そこに社会の文化の程度というものがあるのである。

試みに、日本の入学試験の問題を考えてみるとよい。このことが、いかに日本の現在の教育を墮落せしめているか。そうしてそれが両親の極めて原始的な教育観の圧力によって生れていることを考えてみるとよい。それをさまざまに解釈するけれども、結局は、親の立場の全く個人的な教育観に帰着しているけれども、それが将来において禍根を残すことは火をみるよりも明らかであるにかかわらず、国家も、教育委員会も何ともなし得ないでいる。さまざまな立場で教育が考えられるという立場の分化がないことが問題なのである。

また最近やかましい道徳教育を考えて見てもよい。総理府の審議室で行った世論調査によると圧倒的に道徳教育を今すぐ行うべしという意見が多いという。この意見は、現在道徳教育が行われていないという前提に立っている。それは昔の修身教育が行われていないということなのである。一般国民は、道徳教育即昔流の修身教育なのである。現在はそういう観念的教育が行われず、もっと具体的な生活的な教育が行われて昔よりはるかに進歩している。しかしそれは一般の人々には全然見えない。そういう単純な、思いこんだら命がけ的な頑固さで、道徳教育の風が学校に押し寄せて来ている。子供の中に徳性が育つことの真実の姿を見せようとしても見ようとしぬ。耳をかさないのが、

そういう人々である。

教育というものの科学的な、合理的な理解について、日本社会は不毛の土地といつてよい。すしづめ学級が、殆んど本気で問題にされていないのが、日本の社会である。国会や、県会やで、そういう問題が、どれだけ本気に論ぜられたことがあるか。子供の数が多すぎて、教師が子供につきあえない程のすしづめ学級を平然と見送って、道徳教育などということが言われることが全く不思議なことなのである。徳性とは人間と人間との接触によって身につくものである。そういう教育の実体について見る目を持たないのが、日本の社会である。

教師が、苦勞するのは、そういう所における専門家であるからである。このことの自覚が、今の教師にとっては最も大切なことではないか。しかしともすれば、教師自体にそういう自覚がなく、自らを素人の位置におとして、その結果、振り廻されている教師がいはいないか。日本の過去の教育の伝統は、教師に専門家としての責任を与えないものであった。今や民主主義社会においては、教育のスペシャリストとして、改めて考え直さなければならぬ所に来ているのである。そして、その故にこそ、スペシャリストとしての苦難の道を歩く覚悟も必要である。教師がそれだけの誇りを持ち、教育のスペシャリストとしての、活動を行って、教育自体の立場を社会に確立する以外に誰がそれをやりうるか。

これだけの覚悟があれば、ここ十年、教師が理想を追究して来た努力を今後も続けて、社会の教育観を次第に改め、その上に正しい教育を成立させることがわれわれの唯一の道であることもまた明白なことである。たしかな学校はそこに生まれるのである。

(国立教育研究所員)